

文化・芸術

《名画の扉》

大川美術館コレクション展から

19世紀末、急速に近代化する都市パリに背を向け、「樂園」を求めて放浪の旅を続けたポスト印象派の画家、ポール・ゴーギャン。フランスのブルターニュやアルル、南太平洋のタヒチを旅する過程で、原始的なるもの、そして生と死という人間の根源的なテーマを表現することを追求しました。

1891年に初めてタヒチを訪れたゴーギャンは、一時的にパリに戻って滞在記「ノアノア」を執筆し、その挿絵として10点の木版

19世紀末、急速に近代化する都市パリに背を向け、「樂園」を求めて放浪の旅を続けたポスト印象派の画家、ポール・ゴーギャン。フランスのブルターニュやアルル、南太平洋のタヒチを旅する過程で、原始的なるもの、そして生と死という人間の根源的なテーマを表現することを追求しました。

1891年に初めてタヒチを訪れたゴーギャンは、一時的にパリに戻って滞在記「ノアノア」を執筆し、その挿絵として10点の木版

ポール・ゴーギャン

(1848~1903年)

「マリーナ・ノ・ヴァルア・イノ(悪霊の日)」

1893~94年、木版
紙、20・1枚×35・4枚



(佐藤)